

|                  |   |
|------------------|---|
| <b>Title</b>     | 全学礼拝の恵み：本物を見分ける目と心  |
| <b>Author(s)</b> | 熊谷, 芳郎  |
| <b>Citation</b>  | キリスト教と諸学：論集, Volume26, 2011.3：124-136   |
| <b>URL</b>       | <a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3301">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3301</a> |
| <b>Rights</b>    |   |

SERVE

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

全学礼拝の恵み

## 本物を見分ける目と心

熊谷芳郎

はじめに——自己紹介として

私は人文学部の日本文化学科にお世話になって、今年で五年目を迎えたものです。それ以前は埼玉県の県立高校で、二五年間国語科の教員を務めていました。本日の課題との関係で言えば、私自身はクリスチャンではありません。この点で、今日の発題者に私の名前を認めて不信に思われた方もいらっしゃるはずです。

### 一 非クリスチャンがこの場で話す意味

では、クリスチャンではない私のようなものが、何ゆえ「全学礼拝懇談会」という場で、話す機会を与えられたのでしょうか。

実は今回のお話を阿部洋治先生からいただいたとき、誰であろう私自身が最初に感じた疑問でありました。感じた

だけではなく、大胆にも口に出してお尋ねしていました。

「私はクリスチャンではありません。そういう私が全学礼拝懇談会で話すというのは場違いではありませんか？」と。

それに対して、阿部先生から「クリスチャンではない人の目でどのようなことが見えているのかを話してほしい」というお答えをいただきました。そのお答えに、私はお断りする口実を失い、今日を迎えた次第です。

したがって、皆さんの前でお話をする機会をいただいたことに感謝して、クリスチャンではない立場から、全学礼拝について常々感じていることをお話ししたいと思います。もとよりキリスト教について専門的な知識のない者ゆえ、とんでもない非常識な発言があるかもしれませんが、無知ゆえの過ちと明るくお許しいただきたいと思えます。

ただ、何もないと話にならないので、二〇〇九年一〇月に本大学の三年生全員を対象に実施された「全学礼拝に関するアンケート調査」の調査結果を絡めてお話しさせていただきます。では、どうかよろしくお願いいたします。

## 二 全学礼拝に出席する意義

私の全学礼拝への出席状況ですが、「全学礼拝に関するアンケート調査」の中でも春学期の全学礼拝にどのくらい出席したかを問うていますが、その選択肢でいうと「一週間に一〜二回程度」ということになりました。ただし、限りなく「二」に近い、「一〜二回」です。私と同程度の、「一週間に一〜二回程度」と回答した学生は八%強でした。

ただ、私の場合、出席するのはレポートがあるからでも、勤務評定を気にしているからでもありません。全学礼拝に対して出席するに値する意義を見出しているからです。ただし、その理由は、残念ながらキリスト教への信仰心ではありません。少なくとも、現在の段階では信仰心とはいえません。では、どうして私自身は全学礼拝に参加するのでしょうか。その理由は幾つかあります。おそらく私自身も自覚できていない理由もあるでしょう。しかしここでは、全学礼拝に出席する理由として、最も大きな理由だと自覚していることをお話しします。

実はこのように自分語りをするのは大いに苦手です。しかし、それが本日の私に求められていることではないかと捉えていますので、渋る心を励まして自分を語りたいと思います。

### 三 高校教師としての体験——立ち止まる時間を持つことの大切さ

それには、私自身の県立高校での体験が大きく影響しています。

現在、小学校から高校まで、教員は相当に忙しく動き回っています。どのくらい忙しいかといいますと、ほぼ二ヶ月で靴下の底が擦り切れてしまうほどです。これは私の実話です。

私が二五年間勤務した埼玉県内の高校の中でも、私が最後に勤務していた高校は、全国でも有数の受験校として有名で、公立高校の奇跡としてマスコミでも取り上げられたくらいの学校でした。そのため、その忙しさたるや並大抵のものではありませんでした。放課後は生徒からの質問を受ける時間であつて、その質問の時間は、ほぼ毎日七時近くまで続きます。職員室前の廊下には、質問に答えるために使うようにと机と椅子がずらりと置いてあり、机の上には電気スタンドまで用意されていました。その机もすぐに満員となり、校内のいろいろな場所を探して質

問に答える、いわば個人指導を続けることになりました。四月に赴任した私は一週間も立たずに音をあげていました。そんな私が顧問として担当させられたのがボート部でした。中学校や高校の教員は必ず一つか二つの部活動の顧問を担当しなければなりません。そのため、ボート部の顧問となったことはそれほど驚くべきことではありませんでした。問題は、練習場所です。もとより高校のすぐ近くに競技用のボートを浮かべられるような場所はありません。実は、埼玉県には東京オリンピックのときにボート競技の会場となったボート競技場が、埼京線の戸田公園駅の傍にあります。高校からは駅までの移動などを含めて四〇分ほどかかります。四時に高校を出ても、会場に到着するのが四時四〇分、それから着替えて、用具を調えるのですから、要領のいい生徒でも五時を過ぎてしまいます。それから練習が終わるまで、ボート部の顧問は岸でひたすら待つことになります。もちろん、競技の指導などできるわけもなく、単に岸で待つていればよいのですが、生徒が水の上にいる以上、喫茶店にこもっているわけにもいかず、五時から七時、時によつては八時近くまで、ボート練習場の岸でポ、と、としているわけです。だからボート部だったわけ(?)。

冗談はさておき、練習場での練習は一週間のうち三回程度だったので、毎日戸田公園まで通うわけではありません。しかし、一ヶ月もするうちに、ボート練習場での二時間余りが私にとつて、実に貴重なものとなっていきました。

普段は朝八時前に登校してから夜七時過ぎまで、ほとんど休みらしい休みもない状態で、文字通り飛び回っていました。常に何かを細々としているか、誰かと打ち合わせをしているという状態でした。それが、ボート練習場に行つた二時間余りは、時折目の前を通り過ぎるボートを眺める以外にやるべきこともなく、ひたすら時がたつのを待つのです。実に長く感じた二時間でありました。しかし、すさまじい速さで飛び去っていく時というものが、そ

の二時間はピッタリと止まったように感じられることに気づくようになりました。その二時間は、いろいろなことを考えました。今日の授業のこと、明日までにしなければならぬ仕事のこと、定年まで残り一〇年に近づいていること……、そのうちに、高校の教師としての生き方について、家族のあり方について、子供たちに目指して欲しいこと、自分のこれからの生き方など、忙しい毎日の中では、考えることを思い出しもしないような、でも実に根本的な問題をあれこれと考えるようになっていました。したがって、その二時間が終わって自宅に向かうときには、なんとなく自分の腹が据わったというような感覚さえ覚えるときがありました。普段、ものごとをじっくり考えることもなく、単に目の前のことを処理することだけに追われている者にとつて、じっくりものごとを考える時間を持つこと、自分自身と対話する時間を持つことは実に貴重でありました。

そういえば、阿久戸光晴学長から、聖学院に迎えていただけるといふ電話をいただいたのもその二時間のときでありました。

忙しく飛び去っていく時間を、二時間だけストップさせて、普段は考えない重要な問題について考える時間、もちろん、その時間は強制されたものであり、この二時間があれば何人の答案を採点できる、何人の質問にゆっくり答えることができるかと考えるときもありました。しかし、強制的に立ち止まらされて、仕方なく自分自身を振り返ってみると、今まで自分の全てであるかのように考えていたことが実は大したことではないということに気づいたり、行き詰っているように思えた事が実は別の方法がちゃんとあることに気づいたりしました。実に貴重な、ありがたい二時間でありました。

大変申し訳ないのですが、現在の私が全学礼拝に出席する理由のうち、最大の理由は、このときの体験と同じ、自分をストップさせるためであります。この時間があれば、これこれのことを終わらせられる、あのことを打ち合

わせできるとイライラするようなどきほど、私は全学礼拝に出席したいと思っています。すると、今まであれほど心を占めていた目の前の問題は実はそれほど大した問題ではなく、もつともつとじつくり考えるべきことがあるということに気づくのです。

全学礼拝に関するアンケートで「全学礼拝に対する感想や要望を自由に書きください」という質問があります。その記述式回答の中に、「私はキリスト教ではないのですが、礼拝や授業は必須でなければ出ないと思います。でもいざ出てみると心に残るような話だったり考えさせられるような話だったり、出てよかつたなと感じます」という記述があります。学生の実に素直な感想ではないかと思えますし、私自身の感想でもあります。私の場合、自分で自分に「必須」としているという違いがあるだけです。

#### 四 人に興味を持つ学生

いつまでも私自身の思い出話をしていても仕方がないので、聖学院の学生の話に移りましょう。これまでお話ししてきたように、神を仰ぎ見ているとは胸を張っては言えない、こんな私にとって、全学礼拝に出席している学生はどう見えているか、ということです。先ほど紹介した「全学礼拝に対する感想や要望を自由に書きください」という問いに対する回答がおもしろかったので、以下はその記述を中心にお話しします。

##### 学生の解答の中に

■ 一年生の頃は、レポートのために礼拝に参加していましたが、最近は一人の色々な考え方にふれられるチャ

ンス」だと思い全学礼拝に参加しています。

というものがありません。私自身の大学生時代を思い出してみても、生き方に迷い（これは今でも大いに続いています）、自分自身が分からず（今でも分かりませんが）、いろいろな人の講演会に出かけて行ったり、本の世界にこもったりしていました。二〇歳前後のこの時期は、いろいろな人の生き方、生きる姿勢、生きてきた道のりを知りたいのではないのでしょうか。このほかに、次のような記述もありました。

■良い経験ができているので行って良かったです。

■全学礼拝のレポートを書くのは、初めは面倒臭そうだなと思ったが、実際に始めてからはすごく面倒くさい事ではないなと思った。

これらは、話の内容に興味を持ち、その話を聞いたことに満足を感じているということではないでしょうか。

「全学礼拝に関するアンケート調査」の別の問いでは、「あなたが全学礼拝に出席した目的は何ですか？（いくつでも○）」という書き方で、全学礼拝に出席する目的を尋ねています。それに対する回答としては、「レポートのため」という回答が、有効回答数の八九％と圧倒的なのはある意味では仕方ないこととして、「奨励を聞きたい先生がいたから」という回答が一一％ありました。さらに、全学礼拝で何が良かったかを尋ねた問いに対して「先生の話の内容が良かった」という回答が半数以上ありました。奨励をする先生その人に興味を持ち、あの先生の話を聞きたいという思いで礼拝に参加していることが分かります。

逆に礼拝に対する不満として、退屈だったというのが七六・三％と圧倒的ですが、問題は退屈の中身だと思えます。先に紹介した「全学礼拝に対する感想や要望を自由に書きください」という問いへの回答には、次のような不満が書かれています。



■ 礼拝の内容は聞いても良くわからないから、だんだん興味を持たなくなってしまった。

■ たまに聞いていて話がつながらない人がいるので、事前にしっかりと話をまとめてから話してもらいたいです。

■ 声がわかりづらい、通りにくいお年よりは、正直聞こえにくいので出演は控えてほしい。

三番目の記述は大変失礼な記述ではありますが、このような失望を味わうほどに期待が大きかったと考えます。私自身、学生時代に中村真一郎の講演を聞き、声の聞こえにくさに大変な失望をした記憶があります。不満は期待の裏返しであります。

奨励する人物に興味があり、その人が何を話すかと期待しているのに、話の内容が聞いてもよく分からない、声が聞こえにくい、そこから「礼拝は退屈だ」ということになるのではないのでしょうか。

私も全学礼拝に出席した折の体験として、チャペルの中がシーンとして学生たちが話に聞き入っているという体験を何回かしました。そのような時は、ほとんどの場合、奨励の先生が、ご自身の体験、特に学生時代の体験を話されているときでした。時を隔て、環境は異なりますが、同じ二〇歳前後を過ぎるものとして、学生時代の体験談には心惹かれるのでしょうか。特に、学生時代に苦しんだ、迷った、悩んだ、という体験にはより集中して聞き入っているという印象があります。実際、ある先生がそのようなお話をなさった後、チャペルを出たところで、「今日の話は良かったね」という会話を学生たちがしているのを耳にしたことがあります。学生たちにも、聞き分ける耳と心を持っているということを知って、私自身もうれしい思いをしたものです。

したがって、奨励者の先生方が、ご自身のこと、特に学生時代の体験を中心に話していただけることが、学生たちを惹きつける大きな要因だということが言えるのではないのでしょうか。

## 五 礼拝における共生と強制

次に礼拝に強制的に出席させるという不満について考えます。全学礼拝に対する感想や要望の回答にも、この点についての不満がかなり寄せられていました。

■レポートを出さないと単位がもらえないので強制的に礼拝に出されているようなものだ。

■入学するまで全学礼拝などに参加しなければならぬということには知らなかった。キリスト教の洗礼を受ける人ならまだ良いが、その他の興味のない人に強制させるのはいかなものか？

■強制していいとは言いつつ、単位がもらえないので、結局強制しているのがよくわからない。はじめから強制すると言ってくれた方がありがたい。

■入学したときはキリスト教を強制しないとかいつたくせに、レポートとか強制しているようなものだ。特に日曜礼拝なんて苦痛でしかたない。これは宗教の押し売りだと感じる。とりあえず礼拝は苦痛でしょうがない。精神的に病んでしまう。これは一種、パワーハラスメント行為である。

■礼拝というのは自身の信仰を深めるためのものなので、強要するものではないと思う。祈る心を持ってない人が受けても、意味があるとは思えない。実習とか重なったりして忙しい時期にも、レポートが出されると大変だし、どつちもてきとーになるから困る。

■礼拝に行き、必ずレポートを出さなくてはいけないという、強制的な取り組みは本当にやめてほしい。ただでさえいろいろと忙しい時期なのにレポートを課するのは負担が大きすぎる。私たちがなぜ全学礼拝に行くの

かその理由が分からない。礼拝に行く意味を学生が納得いくように説明してください。まだまだ続きます。

私自身はこれまで述べたように、全学礼拝に出席する意義を感じているものではありませんが、それを差し引いても、出席を強制することは悪いことだとは考えていません。キリスト教に触れる機会が全くなかった学生たちにとつて、聖学院大学に在籍した四年間、キリスト教に触れるという体験ができることは大きな意味のあることだと感じます。特に最後に引用した回答にある、「ただでさえいろいろと忙しい時期なのにレポートを課するのは負担が大きすぎる」という記述には、先にお話した私自身の体験から、実にほほえましいものを感じます。この学生が立ち止まることの意味に気づいてくれることを切に願うものであります。

ところで、先日、研究室に遊びに来た卒業生が、大学に来てまず全学礼拝に出席してきたという話をしていました。その学生はクリスチャンではありません。大学を離れてみて、実に豊かなものに触れていた四年間だったことが分かったという話をしていました。すぐにはその価値が分からないものもあるのではないだろうか、という話をそのときにお互いがしたものです。

とはいえ、強制されていやいやながら出席したという記憶だけが残るのも困りものです。

では、どうしたらよいのでしょうか。クリスチャンではない私としての考えは以下のようなものです。

- (一) キリスト教への理解と出会い
- (二) 本物を見分ける目と心

(一)については、既に様々な機会に成されており、私のようなものが口出しすることではないでしょう。私自身も、自分自身の問題として現在取り組んでいることであります。

そこで、(二)の点について少しお話しします。

私の長女は恵泉女学園という学校に中学・高校とお世話になったのですが、そこでの体験をまずお話しします。ホームカミングデーの折に同窓会が開催した、恵泉女学園大学と短大との統合を考えるフォーラムで、短期大学が定員確保に困っている、という話が短大の学長からありました。ある卒業生から、高校からもつと生徒を送ってはどうか、短大に進むように進路指導をしてはどうかという要望が出ました。当時の恵泉女学園中学校・高等学校の校長は安積力也(あずみりきや)という方で、国際基督教大学大学院修士課程(教育哲学)修了後、新潟市の私立敬和学園高等学校で教頭を務め、私立で唯一の難聴児の学校である日本聾話学校の校長を経て、恵泉女学園中学校・高等学校の校長に招かれたという方でありました。その安積先生が、次のように自身の見解を述べられました。

今できている恵泉女学園大学や短大の内実を、その中の本物と偽物をかぎ分ける生徒を育てる、それが中高教育の課題だと思ふのです。それに答え得るだけの内実を短大や大学がもち得るのなら、たとえ世の中が「あの学校はだめだ、ランクが低い」と言おうとも、恵泉の生徒なら必ず行きます。どんなに外目にはきれいな内容であっても、そこに人間教育的な真理感覚的なものを育て得る内実を感じなければ、たぶん私たちが育てる中高生は行かないでしょう。(『恵泉』四四四号、恵泉女学園、二〇〇二年七月一六日発行)

この一言は、私の心に強烈な印象を残しました。今でも、この言葉に触れたときの興奮を忘れてはいません。ここまで言い切れる自信と、その校長の率いる学校に娘を通わせている喜びを感じたものです。安積先生はその後、基督教独立学園高等学校の校長に移られました。

「本物と偽物をかぎ分ける生徒を育てる、それが中高教育の課題だと思つたのです。それに答え得るだけの内実を短大や大学がもち得るのなら、たとえ世の中が「あの学校はだめだ、ランクが低い」と言おうとも、恵泉の生徒なら必ず行きます。どんなに外目にはきれいな内容であっても、そこに人間教育的な真理感覚的なものを育て得る内実を感じなければ、たぶん私たちが育てる中高生は行かないでしょう。大学に身を置くようになってこの言葉を改めて味わい直すと、実に重い。

しかし、「本物と偽物をかぎ分ける」人間を育てる、その点に関しては、何も中学・高校だけが担うべきものとは思いません。大学に於いても十分に担うべき役割なのではないでしょうか。そのような、「本物と偽物をかぎ分ける」人間を育てる教育にお前はどこまで力を尽くしているのかと問われると、私自身、実に心もとない限りです。しかしながら、それを目指すしかないのではないのでしょうか。

本物を見分ける目と心を学生の中に育てていくこと、それが結果的には全学礼拝の価値と意味を、学生自身が見出していくことにつながるのではないのでしょうか。先に紹介した、「今日の話は良かったね」という学生たちの会話や、大学に来たらまず全学礼拝に出るといふ卒業生の存在は、本物を見分ける目と心が学生の中に育ちつつあることを教えてくれています。そのためには、まず私自身が本物を見分ける目と心を持たなければなりません。また、そのような目と心を持ちたいと努める自分自身の姿を学生に見せることにも価値はあるのではないのでしょうか。

クリスチャンの学生だけではなく、クリスチャンではない学生も交えて行われている全学礼拝に出席している、クリスチャンではない教師として、現在、私自身は自分の役割を以上のように考えている次第です。

## 六 お詫び

全学礼拝をここまでにするため多くの努力をなされた数限りない方々のその労苦に対して、無責任な見解を述べた失礼を幾重にもお詫びして、今日の報告を終わりたいと思えます。今回、この話をするにあたり、自分自身と向き合う時間を持つことができました。このような機会を与えてくださったことに心から感謝いたします。ありがとうございます。

(二〇一〇年二月十七日、二〇〇九年度「全学礼拝懇談会」発題  
全体主題「全学礼拝の恵み」)